

1. 前提史(1945年8月以前の研究史整理を兼ねて)

明治期以降、近代の日本・日本人にとって「韓国・朝鮮」とは如何なる存在なのか？ この新しくも古い史的な命題の解答を短時間で出すことは極めて困難である。しかしながらそれを問い続けることは今日もお求められ、それらは主として「贖罪・懺悔」を基調とし、あるいはその反動としての「自己弁護・開き直り」、あるいはこれらからの逃避的性格が強い「追想・懐古」といった、相互に没交渉な、そして多分に単純化された図式で語られがちである。それゆえ、そのいずれの立場からの論及・論考もやはりそれぞれに幾ばくかの現実の反映なり、史実の照明であるには違いなからうとも、上記の命題に対して、全体像の把握が不明瞭なままに個別に進行してきたのではなからうか。

その一つの大きな原因として、これまでの日韓関係史研究が、その前提と見なすべき戦前の研究成果に対して、あまりにも機械的に無視、あるいは無自覚に追随してきたからである、という仮説を筆者はここで立ててみたい。筆者も含めて、戦前から戦後にかけての研究全体を俯瞰することは、元よりさまざまな限界が存在する。しかし、だからこそ、ここで何らかの方法論的な枠組みに基づく全体像の把握が模索されるべきでもあろう。小文は、そのささやかな試みである。

近代に限らず、戦前期において日韓／韓日関係史を考究する学術的なアプローチの方法としては、やはり政治・外交史、ないしは通商・経済史が主流であり、それにともない数多くの業績が蓄積されてきた。加えて実学的要請・統治方針の趨勢によってなされる農業史・技術史、ないしは考古・美術史、民族史、法制史といった諸分野もおおよそ「官学」の領域に属することとなる。一方で、思想・文化・民俗・宗教関連の研究に関しても、やはり官側の調査記録による情報の蓄積が圧倒的であり、とりわけ村山智順による一連の調査報告が広く知られている。また一方で官側の手に余る分野は、いわゆる「朝鮮通」的な在野の日本人操觚界出身者や朝鮮人研究者によってある時期まで担われており、むしろ官側の方が後追いしているのが一つの特徴となっている。

さて、この戦前期においては純粋に学術的な論争というものは成立しにくかった。とは言え、後述する戦後期における学説上の争点(特に「内在的発展」論の問題)の理論的前提、あるいはそれを実際に担う具体的な人物なり研究が登場しているのである。ゆえに本稿においては戦後の研究史を繙くにあたっての前提作業として、戦前期のそれを必要不可欠のものとして見なしている。以下、若干のスペースを割いてそうした戦前期の状況を通観することにより、日本における近代日韓関係史研究の濫觴を描いていく作業の始まりとしたい。

ここでまずは、個別的な研究の問題に立ち入る前の予備的考察として、韓国併合以降にはじま

る日本による「朝鮮史」研究、そして「史料編纂」の過程を整理しておこう。

まず第一に取り上げるべき人物とその業績は小田省吾(1871~1953)のそれであろう。小田は保護国期の旧韓国政府時代から朝鮮総督府の施政期にかけて、その文教政策、ならびに修史関連事業全般に長く、かつ広汎に亘って関与しており、彼の年譜的な事項を追うことが、日本統治期の当該事業全般を語ることと同義であるといっても過言ではない。

三重県鳥羽出身の小田は、第一高等学校から帝国大学文科大学史学科に入学する、日本の近代大学制度において最初期に史学教育を受けた世代³である。小田は大学卒業後、いくつかの中等学校での勤務を経て、1908年11月に統監府設置下の韓国政府・学部編輯局の書記官(奏任官)に転任した。韓国併合後も引き続き朝鮮総督府の事務官として内務部学務局に編輯課長として出仕することとなった。さらに中枢院の編纂課長を兼任し、さらには1921年からは新設の古蹟調査課長をも兼ねた。1924年には新設された京城帝国大学教授(予科部長)に転出し、1932年3月の停年退官後も各種の地方史編纂、『施政二十五年史』・『施政三十年史』の責任編纂、さらには李王職・中枢院の委嘱による「高宗・純宗実録」編纂まで手掛けている。彼自身の個別研究テーマは多岐に亘り、決して近代史研究者ではなかった⁴。しかしながら、旧韓国時代から「朝鮮古書刊行会」や「朝鮮研究会」の運営⁵にも関与し、また学務官僚時代の末期より手掛ける「朝

¹ 筆者はすでに「日本統治期の朝鮮における〈史学〉と〈史料〉の位相」(『歴史学研究』795、2004年11月)において、近代日本における「修史」の軌跡を踏まえて、それをもって「朝鮮史編修会」、および同会による『朝鮮史』刊行の史的な位相などに関して基本的な整理を行っている。併せて参照されたい。

² 「小田省吾略歴自記」(小田省吾『辛未洪景來亂の研究』京城、小田先生頌寿記念会、1934年9月)。

³ 註2)「小田省吾略歴自記」の記述に基づき、筆者が若干補充(『隆熙三年七月十五日現在 學部職員録』〈学部大臣官房秘書課、1909年〉、『青丘』第14号〈1954年1月〉など参照)した小田の略年譜は以下の通りである。

1871年5月2日：三重県志摩郡鳥羽に父・有馬百鞭、母・高津氏の次男として出生／1883年：伯父・小田健作に入籍／1887年：神宮皇学館入学も間もなく退学。上京、国民英学会・東京英語学校に学ぶ／1891年7月：第一高等中学校予科に入学／1896年7月：第一高等学校大学予科第一部を卒業、東京帝国大学文科大学史学科に入学、坪井九馬三・星野恒・栗田寛・三上参次・井上哲次郎・坪井正五郎・田中義成・那珂通世・林泰輔・大瀬甚太郎・リース・ケーベル・小泉八雲(ハーン)らに学ぶ／1899年7月：大学を卒業、大学院進学もまもなく退学。同年9月に長野県師範学校へ奉職／1900年3月：長野県師範学校から荻中学校に移る／1902年9月：徳島県師範学校校長を拝命／1907年7月：畝傍中学校長を拝命／1908年11月：第一高等学校教授、韓国政府の傭聘を受け、同年11月17日に大韓帝国学部書記官、同12月5日に京城赴任、編輯局勤務、教科用図書編纂に従事(三土忠造の後任業務)／1910年10月1日：朝鮮総督府事務官(内務部学務局編輯課長)／1913年6月：京城専修学校長事務取扱を兼務(大正5年3月まで)／1915年8月：始政五年記念朝鮮物産共進会審査官／1918年1月：中枢院編纂課長事務取扱を委嘱される(朝鮮半島史編纂事業)／1920年：朝鮮民事令及民籍法改正調査委員／1921年6月：旧慣及制度調査委員、同年10月1日、学務局古蹟調査課長を兼務／1922年4月：朝鮮総督府視学官(事務官兼任)叙高等官二等、同年9月、松広寺にて大般涅槃經疏の残欠本を発見／1923年：朝鮮史学会を組織、「朝鮮史講座」を発行。同年11月、朝鮮帝国大学創設委員会委員／1924年1月：朝鮮帝国大学附属大学予科開校準備事務取扱、同年5月、京城帝国大学予科教授・予科部長(事務官兼任)。同10月、学務局編輯課長兼任を解かる／1925年7月：朝鮮史編修会委員／1926年2月：釜山府史編纂顧問(昭和7年まで)、同年4月、京城帝国大学法文学部教授(朝鮮史学第二講座担任)／1927年7月：京城府史編纂委員会顧問、同年12月、叙高等官一等／1930年4月：実録編纂委員を委嘱、同年5月、青丘学会を設立／1932年3月30日：停年退官、同年4月より講師を委嘱(翌年3月まで)／1933年3月：中枢院旧慣及制度調査事務を委嘱、同4月、李王職にて実録編纂事業に専任に従事、同12月、朝鮮総督府宝物古蹟名勝天然記念物保存会委員／1945年：三重県鳥羽に引き揚げ／1953年12月12日：郷里にて物故。享年83歳。

⁴ 例えば、「江華條約締結時の寫眞と遺跡について」(『青丘學叢』4、1931年5月)および「江華條約締結當時の追憶 一昭和六年三月十四日夜、篠田李王職次官邸に於ける談話一」〈羽島半次郎〉(『青丘學叢』5、1931年8月)など、もっぱら史話会的な活動ではあるが、小田による史料発掘の活動は近代史にも及んだ。

⁵ 朝鮮古書刊行会のメンバーは以下の通り(『大東野乘 一』京城、朝鮮古書刊行会、1909年12月)巻末所載の

鮮史学会」の組織化、また青丘学会の『青丘學叢』にも頻繁に執筆するなど、彼は終始、言わば人的なネットワークの構築に情熱を傾けていた。

さて、朝鮮総督府は中枢院における『朝鮮半島史』編纂中止⁶を経て、帝国大学の「史料編纂」、文部省の「維新史料編纂会」にその組織構成上の範をとる「朝鮮史編纂委員会」を1922年12月に発足させた。政務総監を委員長に推戴し、一方で黒板勝美や内藤湖南を顧問としてその組織作りを行った。そしてこれが1925年6月に「朝鮮史編修会」として官制化された。同会は『朝鮮史』の編集・刊行を主任務とし、またこれに付随し、「史料探訪」による史料蒐集とその編纂・刊行事業を併行させていた。なお、会には修史官・修史官補、そして若干の嘱託が配置され、内藤湖南の高弟にして満鉄の歴史地理調査事業に従事した稲葉岩吉<君山>(1876~1940)、総督府学務局古蹟調査課鑑査官から同・編輯課編修官を経る藤田亮策(1892~1960)、老論出身の儒林・在野史家であった洪熹(1884~1935)らがその初期から修史官を務めている。そして、間もなく京城帝大に転出する藤田の後を襲うのが黒板門下生であり東京帝大卒業直後であった中村栄孝(1902~1984)である。

こうしてみると、朝鮮史編修会のスタッフは「帝大国史学」・「満鮮史学」に加えて朝鮮在来の史林という、それぞれ異質な学統を包摂して成立していたと概括できるだろう。そもそも日本の東洋史研究における一つの大きな潮流には、白鳥庫吉以来の近代実証史学の方法論に立脚した「満鮮史」研究があり、さらにその源流には那珂通世・林泰輔・リースらが存在する。この満鮮史研究の担い手となるのは上述の稲葉岩吉をはじめ、池内宏・今西龍ら初期の京城帝大史学科教授陣であった。

ただしこの次の世代は、東洋史研究に占める朝鮮史の相対的な地位の低下に伴い、「(旧制)高等学校→帝国大学」という言わば社会的エリート養成の既定路線を歩む中村栄孝(第一高—東京帝大)や末松保和(佐賀高—東京帝大)ら、大学卒業後に朝鮮史編修会での修史実務を経て総

一覧に依る)。

名譽賛成員:曾禰荒助(韓国統監)・大久保春野(駐劄軍司令官)・宇佐川一正(東拓総裁)・金允植(中枢院議長)・朴齊純(内部大臣)・趙重應(農商工部大臣)／特別賛成員:石塚英藏(統監府総務長官)・岡喜七郎(内部次官)・若林資藏(韓国警視総監)・依孫一(学部次官)・倉富勇三郎(法部次官)・松井茂(警務局長)・小宮三保松(宮内府次官)・荒井賢太郎(度支部次官)・木内重四郎(農商工部次官)・兪吉濬(漢城府民会長)／本会評議員:井上雅二(宮内府書記官)・千葉昌胤(宮内府奎章閣嘱託)・河合弘民(東洋専門学校京城分校幹事)・大岡力(京城日報社長)・小田省吾(学部書記官)・黒崎美智雄(奎章閣図書課長)・前間恭作(統監府通訳官)・國分象太郎(統監府書記官)・淺見倫太郎(高等法院判事)・鮎貝房之進・菊池謙讓・三宅長策(京城控訴院部長)・嶺八郎(東拓秘書長)・釋尾春芳(主幹・朝鮮雜誌社長)。

また、朝鮮研究会(『莊陵誌 平壤續志』<京城、朝鮮研究会、1911年4月>卷末所載の一覧に依る)のメンバーは以下の通り。

評議員:本間九介(総督府取調局嘱託)・河合弘民(東洋専門学校京城分校長)・前間恭作(統監府通訳官)・福田幹次郎(鉄道管理局通訳官)・菊池謙讓(朝鮮通信社長)・三宅長策(京城控訴院部長)・廣田直三郎(総督府中学校教諭)・小田省吾(総督府事務官)・高橋亨(漢城高等学校学監)・淵上貞助・鮎貝房之進(東洋協会学校講師)・大友友之丞(同校幹事)・青柳綱太郎(同)・飯泉良三(同)。

⁶ 「日鮮ノ同族タル事實ヲ明ニスルコト」を目的に編纂される『朝鮮半島史』に関しては、朝鮮総督府『朝鮮半島史編成ノ要旨及順序 朝鮮人名彙考編纂ノ要旨及順序』(1916年9月)、および朝鮮総督府朝鮮史編修会『朝鮮史編修会事業概要』(1938年6月)を参照されたい。

督府の教学官なり京城帝大の教官に採用されていく「国史学」出身者たちが続いていくことになる。また今西・小田らの薫陶を受ける田川孝三や、後出する森田芳夫ら「京城帝大予科→京城帝大法文学部史学科」なる〈外地〉出身者世代の朝鮮史研究が、結果的ではあれ、戦後の日本における朝鮮史・日韓関係史研究への橋渡しにおいて重要な位置を占めていることは否定できない。

とはいえ、この時期においては本格的な近代史研究は、田保橋潔や奥平武彦（『朝鮮開国交渉始末』1935年）などを除けば、いまだなされる段階に至っていなかった。それでも金庠基による「東学乱（甲午農民戦争）」に関する先駆的な史的考察に基づく論考が戦時期（1940年）に開始されるなど、日清戦争期を上限にした近代史研究の萌芽は確認できる。

京城帝国大学法文学部の教授（国史学担当）であった田保橋潔（1897～1945）は、朝鮮史編修会において中途より『朝鮮史』の編修に嘱託として参画し、のちには実質的な主宰者となっていった。アカデミックな領域において戦前期になされた日韓／韓日における近代の関係史研究の濫觴はやはり田保橋の業績であり、とりわけ主として朝鮮半島をめぐる近代の国際情勢を活写した名著『近代日鮮関係の研究』（1940年）におけるその史料渉猟の範囲と実証の手法・枠組みはすでに古典の部類に属するも、今日に至ってなおそれを凌駕する規模の研究は現れていない。ただ、その『近代日鮮関係の研究』も、朝鮮史編修会の人的・物的支援なくしては成立しなかった⁷。また、1937年に本編の最終巻を刊行（最終巻である「総索引」は1940年3月刊）し、また稲葉が満洲建国大学に、中村が総督府学務局編輯課編修官に転出した後の朝鮮史編修会において、田保橋は総督府文書課に保管されていた日本公使館・韓国統監府時代の公文書を調査・撮影し、また京城帝大移管後の奎章閣図書から旧大韓帝国時代の文書を調査するなど、『朝鮮史』編修の過程ではなし得なかった、来るべき近代史・近代史料の修史編纂に向けて着実に作業を進めていった。そして、その一端が『近代朝鮮史研究』（1944年刊）や『朝鮮統治史論稿』（1945年、未刊）として纏められたのである。

ここで、必ずしも史学的手法に則った研究ではないものの、福田徳三・吉野作造・矢内原忠雄らの植民地研究・植民政策論にも目を向けておきたい。彼らの論考は場合によっては朝鮮総督府の施政に厳しい批判を投げかけるものではあったものの、経済史研究のみならず日韓関係史研究上でも韓国併合後には消沈せざるをえなかった政治外交分野に代わる一つの画期をなすものであった。特に福田の研究は、マルクス経済学・発展段階論に基づく韓国経済論として最初期（1903年から『内外論叢』に掲載⁹）の研究であり、今日においては韓国・朝鮮社会を「停滞」していた

⁷ 同書は著者として田保橋の名を冠しておらず、あくまでも朝鮮総督府中枢院からの秘密出版としての刊行形式とった。それゆえ、田保橋は同書を学位請求論文として東京帝国大学文学部に提出したが、審査にあたった平泉澄・小倉進平らの不興を買い、結局通過しなかった（「先学を語る 一田保橋先生一」／東方学会編『東方学回想 V 先学を語る（4）』／東京、刀水書房、2000年5月）。

⁸ 矢内原忠雄「朝鮮産米増殖計劃に就て」（『農業経済研究』〈岩波書店〉2-1、1926年2月）。

⁹ 福田徳三「経済単位發展史上韓国ノ地位」（『法律學經濟學 内外論叢』2-1・2-5・3-6・4-1、1903年2月・1903年10月・1904年12月・1905年2月）、のち『経済學研究』（東京、同文館、1907年6月初版）に収録。

とみなしたとされることから、その評価は芳しくない。ただ、当時新進気鋭かつドイツ留学帰りの経済学徒が史的段階発展における「封建制」の有無を論ずるなかに韓国・朝鮮をその題材の一つに選んだことの方に、研究史を整理する立場からはいささか注目してみたい。

また、宮城県出身の吉野作造(1878～1933)は、仙台の第二高等学校から東京帝国大学法科に進み、同大法学部教授を経て朝日新聞社に入社する。福岡・柳川出身である海老名弾正の影響もあり、基督教主義に基づく社会啓蒙運動を展開し、また彼が指導した学生たちが「新人会」を組織し、この中から多くの無産政党・労働運動の指導者(例えば麻生久・赤松克麿・宮崎龍介ら)を輩出するなど、昭和戦前期の非共産系左派革新勢力を生み出す母体ともなっていた。また、吉野自身も福田徳三とともに「黎明会」を組織し、特に朝鮮人留学生を篤く支援¹⁰するとともに、朝鮮総督府の施政を痛烈に批判し、それをたびたび彼の主たる言論の場であった『中央公論』誌上¹¹にて発表している。また、三・一独立運動の事件発生を受けて自ら朝鮮へ調査¹²に赴き、また当時の朝鮮総督府警務局長である丸山鶴吉と『新人』(海老名主宰の啓蒙雑誌)誌上で論争¹³を闘わせたことなどは、いわゆる「武断統治」の終焉、「文化政治」開始期の象徴的な出来事であった。ともかく、吉野ら基督者・自由主義者によるラディカルかつ〈社会科学〉的手法に基づく朝鮮統治批判は、まさしく大正デモクラシーの申し子であり、かつ1945年8月以降の諸研究分野におけるその方法論的な伏流ともなったものである。

以上は言わば「官製」の研究であったが、韓国併合以前より朝鮮半島に居住していた日本人集団による「史談会」的活動も見ておきたい。対象とすべき人物は多数に亘るが、ここでは菊池謙讓と今村鞆の2名に絞って取り上げたい。

旧韓末から日本統治期にかけての民間の在韓・在朝日本人の職能的類型としては、商工人・会社員・公益団体職員(金融組合など)・農林漁業従事者などが考えられるが、ここに操觚者、すなわち新聞・雑誌などのジャーナリストや、元官吏なども含まれよう。

菊池謙讓(1870～1953)は熊本県八代の出身であり、東京専門学校(現:早稲田大学)卒業後に同郷の徳富蘇峰が経営する民友社に入る。そして、『國民新聞』の特派記者として朝鮮半島に渡り、日清戦争時には従軍記者として平壤攻防戦を取材した。のち、「閔妃殺害事件」に関与し、一時的に退韓処分となるが、1895年からは再び漢城で熊本国権党の佐々友之・安達謙蔵らとともに

¹⁰ 黎明会は『黎明講演集』を刊行しており、その第6集が「朝鮮問題號」(1919年8月)であった。内容は、吉野作造(「朝鮮統治の改革に関する最小限度の要求」)・木村久一(「サーベルの同化」)・福田徳三(「朝鮮は軍閥の私有物に非ず」)・阿部秀助(「繼母根性は去れ」)・麻生久(「自らの良心にかへれ」)・内ヶ崎作三郎(「朝鮮問題の背景としての形式主義」)。

¹¹ 「滿韓を視察して」(1916年6月号)／「對外的良心の發揮」(1919年4月号)／「新總督及び政務總監を迎ふ」(1919年9月号)／「いはゆる呂運亨事件について」(1920年1月号)／「支那朝鮮基督教徒の大會不參加」(1920年10月号)／「朝鮮問題に關し當局に望む」(1921年2月号)／「朝鮮人虐殺問題に就て」(1923年11月号)など。

¹² この時の模様は『天道教』研究資料〈1〉～〈6〉(『國家學會雜誌』33巻5・7～10号・34巻1号、1919年10月、1920年1月)に採録されている。

¹³ 丸山鶴吉「朝鮮統治策に關して吉野博士に質す」(『新人』21巻3号、1920年3月)／吉野作造「朝鮮統治策に關して丸山君に答ふ」(『新人』21巻4号、1920年4月)。

『漢城新報』¹⁴創刊に携わった。同新聞が韓国統監府の買収工作により『京城日報』となると、これを忌避する菊池は新たに『大韓日報』を発行し、また大邱居留民団長を務めるなど、一貫して朝鮮半島に居住し続け、ついには「引揚げ」まで経験することになる。また、小田省吾らとともに「高宗・純宗実録」編纂にも従事¹⁵しており、さらに戦時期には一進会・李容九・内田良平などに関する文章をしばしば執筆¹⁶している。

また、今村鞆(1870～1943)は高知県出身であり、法政大学専門部を卒業後、一介の警察官から叩き上げて警視庁の警部となる。さらに岐阜県の海津郡長を経て、1908年7月に忠清北道の警察部長として韓国に赴任する。以降、1925年3月の退官までに京城南部署長・平壤署長・済州島司・元山府尹等を歴任¹⁷している。そして、彼の後年における幅広い研究は警察官僚・地方官在

¹⁴ 熊本国権党グループが外務省・在韓日本公使館の支援を受けて1895年3月より漢城にて刊行した新聞(1903年の途中までは隔日刊)。李海暢『韓国新聞史研究』(ソウル、成文閣、1971年11月)に依れば、第101号までは小型新聞であったが、第102号(1895年9月9日付)より紙面を拡充し、4面構成(1・2面:韓文、3面:日文、4面:広告)となった。また時期は不詳であるが、ある時期からは韓国語版と日本語版とを交互にそれぞれ隔日刊として発行していたようである。1903年10月からは日刊化されたようであり、しかも日韓両語版が作製・販売されたようである(1903年9月25日付2面「社告」欄)。

なお、その102号からは延世大学校中央図書館にてマイクロフィルムによってその内容を確認することが可能である。1903年10月以降の分は韓文版のみである。以下、同大における所蔵号数を示しておく。ただし、1299号代から1300号代に切り替わる際に発生した号数の乱れ(1300号が1200号となった)がその後も訂正されていない。よって以下の号数は筆者(永島)が適宜に補正した号数である。

1895年:102号～156号(9月9日～12月27日)

1896年:157号～335号(1月5日～12月28日)

1897年:336号～354号(1月5日～2月15日)

1902年:1118号～1269号(7月11日～12月28日)

[欠]:1232号～1256号、1258号、1266号

1903年:1270号～1396号(1月4日～12月24日)

[欠]:1272号、1282号、1290号、1295号、1307号、1327号～1377号、1381号、1384号

1904年:1400号～1644号(1月1日～11月6日)

[欠]:1416号、1419号、1432号～1478号、1590号、1597号、1598号、1601号

1905年:1776号～1779号、1840号～1846号(5月4日～5月7日、9月10日～9月17日)

¹⁵ 高宗・純宗実録編纂委員の構成は以下の通り。

委員長:篠田治策(李王職長官・法学博士)／副委員長:李恒九(李王職次官・男爵)／監修委員:小田省吾(京城帝大教授)・鄭萬朝(経学院大提学)・朴勝鳳(中枢院参議)・成田碩内(李王職嘱託)・金明秀(元李王職事務官)・徐晩淳(元宮内府秘書院丞)／編纂委員:徐相助(中枢院参議)・南奎熙(元中枢院参議)・李明翔(元宮内府宗正院卿)・趙経九(元宮内府奉常司提調)・洪鍾瀚(元朝鮮総督府郡守)・権純九(元朝鮮総督府郡守)／史料蒐集委員:朴胄彬(李王職事務官)・李源昇(元李王職事務官)・李能和(元朝鮮総督府編修官)・**菊池謙讓**(元大陸通信社社長)／庶務委員:末松熊彦(李王職事務官)／志賀信光(李王職事務官)／会計委員:佐藤明道(李王職事務官)／監修補助委員:金碩彬(元朝鮮総督府郡守)・江原善植(元朝鮮総督府理事官)・崔寧鎮(元宮内府秘書院丞)・崔奎煥(元李王職属)／編纂補助委員:濱野鐘太郎(元朝鮮総督府道警視正)・李秉韶(元宮内府秘書院丞)・李豊用(元李王職属)・水橋復比古(元朝鮮総督府郡書記)・李準聖(元農商工部主事)・金炳明(元法部主事)・洪明基(元宮内府水輪課主事)／史料蒐集補助委員:北島耕造(元京城高商嘱託)

¹⁶ 「韓国併合に登場した 内田良平」『國民總力』6巻15号、1944年8月)の他、「菊池謙讓(キクチケンゼウ) 熊本縣出身 明治三年生 明治二十六年早稻田専門學校英語政治科卒 明治二十七年國民新報社入社 明治三十三年漢城新報社々長就任 昭和五年李王職編纂委員 昭和十三年より現今まで近代朝鮮史 金玉均傳著作 目下李容九傳編纂中 現住所 京城府城東區新堂町四三二」(和田八千穂・藤原喜蔵編『朝鮮の回顧』京城、近沢書店、1945年3月、「執筆者略歴」、下線は筆者)という記録もある。

¹⁷ 今村の経歴・業績とその人となりについては以下の訃報記事がよく伝えている。

「今村鞆翁 半島における民俗學の權威として知られてゐる京城府宮井町八九今村鞆(號螺炎)翁は、宿痾療養中氣管支炎を併發し十一日午後九時五分自宅で逝去した、享年七十四、なほ告別式は十三日午後三時から宮井町の自宅で神式により執行される。翁は高知県高岡町の出身、法政大學法科卒業後警視廳警部を振り出しに

勤時代に培われたものであることは言を俟たない。朝鮮史編修会が設置されるとその嘱託(1930年7月～1931年12月)を務め、また中枢院においても長らく嘱託として各種の民俗史料の蒐集と資料集の刊行において中心的な役割を果たした。無論、これらは「民情調査」の名目で行われる一種の治安維持・犯罪防遏にかかる基礎調査でもあり、総督府の統治を円滑になさしめるところに主眼はあった。しかし、今村の著述活動¹⁸にはそれだけには止まらない人間社会の風俗全般に対する飽くなき好奇心¹⁹が後押しした面も多々あったようである。

菊池と今村は偶然ではあるが同い年であったこともあり、また京城における日本人社会の古参メンバーであったゆえ、自然、歴史の「語り部」的な役割を担っていった。日中戦時下に創刊され、1943年12月まで刊行された『書物同好會會報』には菊池や今村をはじめとする民間の史家、企業人、そして京城帝国大学の教員などが広く執筆していた。また、同報には櫻井義之らによって近代史関係の資料に関する文章も掲載され、今日からみても貴重な内容を含んでいる。なお、その発行体である「書物同好会」はそもそも吉野作造が主宰した「明治文化研究会」(1924年発足、機関誌『新舊時代』→『明治文化研究』→『明治文化』)²⁰の系譜を引き²¹、明治文化研究会が持っていた反官学的な雰囲気濃厚に持った集まりであった。

とにかく、その評価は様々であろうが、官側、特に朝鮮史編修会による修史事業の範囲が日清戦争開戦時までに限られていた以上、それ以降の歴史を当事者の目から記録・記述していったことの史的な位相は、決して近代史研究の主流とは呼べないものの、やはり一定の役割を果たしたと考えるべきである。戦後、日本に引き揚げた書物同好会のメンバーは、東京で再び会合を再開し、やがてこれが「朝鮮学会」に合流していったことを敢えて書き添えておきたい。

いま一つ、無視できない研究史的営為として内田良平ら黒龍会メンバーによる〈亜細亜主義〉・〈日韓合邦〉顕彰の運動も強いて挙げておきたい。上述の「朝鮮通」の系譜にも属し、『日韓合邦

岐阜縣海津郡長を勤めたのち明治四十一年渡鮮、忠清北道、江原道各警察部長、南部(現本町)署長、平壤署長を歴任、初代濟州島司、元山府尹を経て李王職勅任庶務課長となり大正十四年退官以後は専ら人參の研究に没頭し、その『人參史』七巻は學界における貴重な文献史料として尊重され、また考古民俗、土俗の造詣深く『朝鮮風俗集』『朝鮮の姓名に關する研究調査』『高麗以前風俗資料撮要』の多數の著書があり、朝鮮土俗研究の第一人者として貢献するところ大であった、また川柳、俳句等にも趣味をもち現在朝鮮川柳協會々長で活躍してゐた(『京城日報』1943年1月13日付朝刊3面)。

¹⁸ 『朝鮮風俗集』(京城、斯道館、1914年11月/訂正3版:京城、ウツボヤ書店、1919年12月)・『朝鮮漫談』(京城、南山吟社、1928年8月)・『船の朝鮮』(京城、螺旋書屋、1930年11月)・『朝鮮の姓名氏族に關する研究調査』(朝鮮總督府中枢院、1934年11月)・『朝鮮風俗資料集説 扇 左繩 打毬 匏』(朝鮮總督府中枢院、1937年3月)・『人參史』1～7巻(朝鮮總督府專売局、1934年8月～1940年3月)・『李朝實録風俗關係資料撮要』(朝鮮總督府中枢院、1939年8月)・『朝鮮の國名に因める名詞考』(朝鮮總督府中枢院、1940年6月)・『高麗以前の風俗關係資料撮要』(朝鮮總督府中枢院、1941年3月)・『李朝各種文獻風俗關係資料撮要』(朝鮮總督府中枢院、1944年5月)などがある。

¹⁹ 『朝鮮民俗』第3号(1940年10月)には「今村鞆翁著作目録」が掲載されているが、ここに見えるように、大正末期から昭和初期に刊行されていた会員制の風俗専門雑誌『變態資料』に警察官時代からしばしば執筆していたことから今村の趣向の一端が見て取れよう。

²⁰ 「[座談会]維新史研究の歩み(第二回) 一明治文化研究会をめぐる一」(『日本歴史』247、1968年12月)を参照されたい。

²¹ これらの経緯については櫻井義之「書物同好会顛末記」、および同「朝鮮對外關係史研究への序説」(いずれも『青丘餘録』<1980年6月>に所収)を参照。

秘史』(1930年)、そして東亜同文会による『對支回顧録』と並ぶ情報量を誇示する黒龍会編『東亜先覺志士記傳』(1936年)はまずもって自己の顕彰物であり、歴史学研究を目的に書かれたものでは当然ない。しかし治安当局たる朝鮮総督府の忌憚に触れる内容、乃至は日本政府の対アジア政策を痛烈に批判する言辞を多く含み、しかも取り扱う時期も当時としては最近世のものであった以上、厳密なる史料批判を前提にした上でならば、特定の政治集団からみた日韓関係の叙述として研究史の俎上に置くべきであろう。一定の潤色・美化はある意味で致し方ないとしても、『日韓合邦秘史』の内容にしても元史料の改竄等はほとんどないとされる²²以上、まずは検討するに足る対象である。

ただ、こうした国家主義的な色彩が濃い右派ナショナリズム運動は、戦後歴史学では閑却され続けてきた題材である。ただし、近年における地方史研究の着実なる進捗²³とも相俟って、自由民権運動—国権運動—初期社会主義運動は、それぞれがけっして孤立的・対立的な概念ではないことが明らかにされつつある。そしていわゆる「アジア主義」形成との連関からも、従来の帝国主義研究・ファシズム論との安易な連結は、もはや前時代の遺物となっている。すでに、今後の課題はそうした混交・綯い交ぜ状態の各思想的行動を史的に丹念に跡づけ、その捻れなり絡み合いを解きほぐしていく段階に移行しているのではなかろうか。その際、そのアジア主義の起点たる「朝鮮問題」をめぐる近代日本人の対応を吟味することも、日韓関係史研究の大きな課題であり、すでにその基本的な枠組みそのものは戦前期においてかなりの部分が語られ済みなのかもしれない。

ただし近代日韓関係の研究に限らず、戦前期の朝鮮史研究はほぼ日本人研究者に独占されていた。1910年8月の韓国併合により、まず<国>対<国>の関係という枠組みが崩れ、ひいては対中・対米英戦時下においていわゆる「内鮮一体」化が声高に喧伝され、朝鮮史研究も日本の「国史」を構成する一つのファクターとしての位置付けがなされていった。それゆえ、朝鮮人側研究者の本格的な登場はやはり「解放」後とならざるを得なかった。それでも、のちの北朝鮮において史学界をリードする白南雲や李清源の著作²⁴が1930年代には相次いで刊行され、また日本統治末期から米軍政期にかけて京城帝大史学科(選科)出身の金聖七ら最初期の京城大・ソウル大にて教鞭をとることになる世代が登場する。特に白南雲による「朝鮮封建社会論」は、戦後の「資本主義萌芽論」に多大な影響を及ぼし、反面において李清源による「朝鮮社会停滞論」に基づく批判が行われるなど、まさに戦後の日本において論争化する「内在的發展」における資本主義的社會

²² 櫻井良樹【解題】内田良平と内田良平文書(『内田良平文書』第1巻、東京、芙蓉書房出版、1994年6月に所収)。

²³ 早くには、西尾陽太郎「九州における近代の思想状況」(福岡ユネスコ協会編『日本近代化と九州』<九州文化論集4> 東京、平凡社、1972年7月)があり、また石瀧豊美『玄洋社発掘 もうひとつの自由民権』(福岡、西日本新聞社、1981年5月/のち1997年8月に増補版)がそうした業績の中でも代表的である。さらに近年では地方自治体史編纂の一環として『福岡県史 近代資料編・自由民権運動』<執筆編集:有馬學・江島香・石瀧豊美>(福岡、西日本文化協会、1995年7月)が上梓され、玄洋社の成立期における福岡の自由民権運動に関する網羅的な史料集となっている。

²⁴ 李清源の活動および著作に関しては、広瀬貞三「李清源の政治活動と朝鮮史研究」(『新潟国際情報大学 情

発展の有無に関する議論を先取りするものでもあった。そして、大韓民国建国後における史学研究の蓄積・史料刊行と研究者養成が本格化していくにしたがい、つまりは韓国における「国史学」の誕生により、ようやく日韓双方の研究が揃い踏みする態勢が具現することになった。よって、今日的な用語法としての日韓／韓日「関係史」なるカテゴリーは、学術的にはやはり1910年8月でいったん途切れ、1945年8月以降に再登場したものであることは言を俟たない。

2. 戦後における近現代日韓関係史研究の消長

本節では、前節の内容を受けて、今度は戦後期の研究史について述べていくことにしたい。とは言え、ただ一概に近現代の日韓関係史研究と言っても、その範囲は止めどなく広まるゆえ、紙幅の関係からすべてに関して言及を行うのは不可能である。よって、ここでは狭義の、すなわちテーマを極めて限定した上で近現代日韓関係史に関する代表的な研究について、その研究史的位置を整理してみたい。

ここで、一つのアプローチとして日本人による特定の歴史的イベント・テーマの取り上げ方の推移を通時的に見てみたい。このことによって逆に前節にて詳述した戦前期の研究と、戦後期のそれとがいかなる連続・非連続で語られるべきなのかについても一定のメルクマールを提供してくれる。なお、その素材は「東学党の乱／甲午農民戦争」、および「日清戦争」である。これらはすでに前節にて取り上げた田保橋を初めとする研究者たち、あるいは「朝鮮通」たちの執筆動機ないしは業績の中に含まれているものではあり、よって一部重複するものも当然含まれている。ここでまずは時系列で戦前期における当該事項に関する主な文章・著書等を下記に掲げておきたい。

服部徹『小説 東學党』(1894年3月)

清藤幸七郎編(吉倉汪聖)『天佑侠』(東京、新進社、1903年10月)

鮎貝房之進「東學黨につきて」(『韓国研究會談話集』4、1905年7月)

鮎貝房之進「東學黨及裸負商」(『朝鮮』<朝鮮雜誌社版>25、1910年3月)

渡瀬常吉「朝鮮騷擾事件の真相と其の善後策」(『新人』20巻4号<通225号>、1919年4月)

吉野作造『天道教』研究資料(1)～(6)

(『國家學會雜誌』33巻5・7～10号・34巻1号、1919年5・7～10月・1920年1月)

山本忠美「天道教とは何ぞや」(其一)・(其二)(『新人』20巻8・9号<通229・230号>、1919年8・9月)

渡邊彰『天道教と侍天教』(京城、大阪屋号書店、1919年11月)

青柳綱太郎『朝鮮獨立騷擾史論』(京城、朝鮮研究会、1921年3月)

細井肇「侍天教と天道教」

(『鮮滿の經營 朝鮮問題の根本解決』東京、自由討究社、1921年12月、「参考資料」55～130頁)

有馬祐政「朝鮮の二賢哲 一李退溪と崔濟愚一」(『東亞之光』<東洋協會>17巻1号、1922年1月)

報文化学部紀要<人文科学編>』7、2004年3月)を参照されたい。

細井肇『侍天教の教旨 東經正義 鳳凰琴』〈満鮮叢書3〉(東京、自由討究社、1922年11月)
幣原坦「朝鮮の天道・侍天教」(『世界聖典外纂』東京、世界文庫刊行会、1923年5月、45～55頁)
幣原坦「天道教・侍天教」(『朝鮮史話』東京、富山房、1924年12月、513～531頁)
葛生能久『日韓合邦秘史』(上)(東京、黒龍会出版部、1930年)
草深常治「天道教瞥見」(『朝鮮』192〈朝鮮総督府〉、1931年5月)
村山智順『朝鮮の類似宗教』(京城、朝鮮総督府、1935年)
長風山人(菊池謙讓)「東學黨史話」(『金融組合』127、1939年4月)
李碩奎「父 李容九を語る」(上)・(中)(『緑旗』4巻10・11号、1939年10・11月)
櫻井義之「小説『東學党』とその著者」(『書物同好會報』6、1939年12月)
田保橋潔『近代日鮮關係の研究』下、(京城、朝鮮総督府中枢院、1940年3月)
石井壽夫「教祖崔濟愚における東學思想の歴史的展開」(『歴史學研究』12巻6号、1941年6月)
井上右『武田範之傳 興亞風雲譚』(東京、平凡社、1942年9月)
平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』(東京、平凡社、1945年6月)

上記一覧から、日本人「朝鮮通」にとっては東学(党)とは、当初は明治中期に大流行する『經國美談』(矢野龍溪)や『佳人之奇遇』(東海散士・柴四朗)をはじめとする「政治小説」のモチーフたりえる「政治理想の實踐」であったことが見て取れる。実際に若き日の内田良平や武田範之もまた「天佑侠」を名乗る浪人グループの一員となり、東学農民軍との連携を模索した。この経験を足掛かりにして朝鮮問題からひいては中国・満蒙問題に通暁する民間壮士として一目おかれていくことになるのは周知の通りである。

これが韓国併合期を挟んで、1919年3月の三・一運動後は治安維持を目的とした天道教・侍天教など「類似宗教」に対する監視的な研究・調査となり、また基督者を中心とする「新附の民」に対する慈善、あるいは権利擁護といったデモクラシー的な言論の素材に移行していく。さらに日中・日米戦時期になると、今度は「内鮮一体」政策の遂行において一定の利用価値が見出され、「顕彰」の対象とされていく。あるいは、すでに「歴史学」の対象とさえなりはじめている。その限りにおいて、すでに見た菊池謙讓の執筆行動と軌を一にする現象であり、当初は『日韓合邦秘史』すら朝鮮では発禁状態であったのが、1940年を前後する時期より、一進会も含めた東学に関する日本人側による言説が言わば解禁²⁵されたと言えよう。これは戦時下の日本において、かつては禁忌にも近かった亜細亜問題が、日中戦時下に東亜協同体論・東亜新秩序が喧伝され、ひいては「アジアの解放・復興」・「大東亜共栄圏建設」なる国是に沿うものと再認識、ないしは換骨奪胎され、俄にそうした歴史認識に基づく著作が増えていたこと²⁶とも無縁ではない。ここで一定の歴史

²⁵ 例えば「京城日報」紙上では1939年3月4日付の朝刊に「一進會とは」、および同3月8日付朝刊に「讚へん『内鮮一體の功勞者』李容九翁」、同11月10日付夕刊に「李容九追慕 一内鮮一體の先驅者」といった記事が掲載され、以降も一進会・大東一進会関連の記事が散見されるようになる。

²⁶ いわゆる思想転向者や、国家社会主義者たちがこの時期、相次いで日本の国家主義運動史を整理しようとする文章を数多く発表した。とりわけ、その源流として明治時代の朝鮮問題(西郷隆盛・「征韓論」問題・士族反乱・自由民権運動など)をおしなべて取り上げているのが特徴的である。木下判治『日本國家主義運動史』(東京、慶

の評価がなされ、それが今日にまで連なる「アジア主義」理解の枠組みを提示したところで、まさに敗戦を迎えたのである。

そして、これらは戦後における東学(「東学党の乱」・「甲午農民戦争」)に関する²⁷研究(日本語で書かれた在日韓国・朝鮮人／韓国人留学生の研究もここに含む)にも様々な形で影響を及ぼしている。そして、それらはやはり日清開戦に至る政治過程における日本と朝鮮との関係を、政治・外交・軍事史的に捉え、しかも日本の「帝国主義」・「アジア侵略」の序曲として位置付ける研究が数多くなされることになった。その一方、特に日本近代史研究者からは、明治政局史・国際関係史より丹念に読みとっていく実証作業の方向性が強調される研究も出され、その意味の限りにおいて戦前期の研究を踏まえたオーソドックスな実証研究が進展を見ている。

また、日清戦争勃発の一つの契機となった東学に関して、これを「農民戦争」なるエンゲルス流の闘争史観から止揚し、民衆史・宗教社会史的な観点をもって新たに地域の伝統社会に根ざした東学論を構築せんとする実証研究²⁸が登場しているが、これらは研究史的な系譜からすれば(継承しているという意味ではない)、戦前の村山智順・小田内通敏らや崔南善・孫晋泰らにまでは遡ることが出来る。

そして、「日露戦争」に関する研究そのものは日韓関係史研究とは馴染まない部分も多いが、「保護国化」から「韓国併合」に関わる研究²⁹までが、さしあたって先述の狭義の日韓関係史研究における一つのクライマックスを成している。そして、この時期に関する研究は韓国・朝鮮近代史研究と日本近代史研究とが、論点においても、また史料においても乖離しはじめるのである。使用言語の問題もさることながら、世代交代の進行と論点の細分化が進展した結果、双方が相手側の研究水準を厳密に把握せず、またそうしたことにさして興味を抱かないことにその一因がありそうである。

3. 総括(まとめに代えて)

戦後の日本において、近代の日韓関係史、ないしは近代韓国／朝鮮史が再び歴史学研究的の俎上に載せられた時、その題材とされたものはやはり、その時々において極めて現実的、あるいは

應書房、1939年10月)・津久井龍雄『日本國家主義運動史論』(東京、中央公論社、1942年5月)・同『大西郷』(東京、昭和刊行會、1943年9月)・林房雄『勤皇の心』(東京、創元社、1943年4月)などがそれらの代表的著作である。

²⁷ 代表的な研究としては以下のものが挙げられよう。中塚明『日清戦争の研究』(東京、青木書店、1968年3月)／藤村道生『日清戦争—東アジア近代史の転換点—』(岩波新書) (東京、岩波書店、1973年12月)／朴宗根『日清戦争と朝鮮』(東京、青木書店、1982年12月)／崔碩堯『日清戦争への道程』(東京、吉川弘文館、1997年2月)／高橋秀直『日清戦争への道』(東京、東京創元社、1995年6月)／井口和起『日本帝国主義の形成と東アジア』(東京、名著刊行会、2000年4月)。

²⁸ 代表的な研究として、金義煥『近代朝鮮東学農民運動史の研究—1860年～1893年を中心に—』(大阪、和泉書院、1986年9月)と、趙景達『異端の民衆反乱—東学と甲午農民戦争—』(東京、岩波書店、1998年12月)が挙げられる。

²⁹ これらに関する研究も枚挙にいとまがない。ここでは研究レビューとしても有用な、森山茂徳『近代日韓関係史研究』(東京、東京大学出版会、1987年6月)と、海野福寿『韓国併合史の研究』(東京、岩波書店、2000年10月)を挙げておきたい。

は政治的な関心より出発するものが多かった。特に、1945年以降から朝鮮戦争期にかけての〈アジア連帯〉が模索されるなかでの混沌的状况から、1960年代に至ると「明治百年」という近代日本における一つの大きな節目を迎える中で「明治維新」「自由民権運動」の再検討、またこの発展型として日清戦争・日露戦争・韓国併合に至るまでの明治政局においてのいわゆる「朝鮮問題」にかかわる研究テーマが多く設定されはじめた。さらに朴正熙政権下にあつて妥結を見る「日韓交渉」、そして締結される「日韓基本条約」によって日韓の国交正常化が達成されるのと相前後して「内在的發展」、またこれと対をなす「停滞史観／他律性論の克服」が主として社会経済史研究の分野から強く唱えられ始める。

ともあれ、こうした「内在的發展」史観／「停滞」史観、いずれともア・プリオリに段階発展説的な資本主義萌芽論、ないしは西欧的な「近代」を至上的な前提とする議論であり、70年代末から80年代にかけてはそれらに対する批判的な見解も数多く出されることになる。特にその「一國主義」的な方法論的自己撞着について日本側の学界は自己の再検討を迫られることになる³⁰。ただその一方で、主として国内の政治・経済的状况によっていまだ韓国においては活潑な議論を呼ぶには至らず、北朝鮮においても金日成体制の硬直化・個人崇拜の強化が進展することにより、共和国の歴史学界は急速に混迷の度合いを増していくのみであった。

さらに1970年代から80年代にかけての近代史研究としては、前時代に比して格段に向上した史料状況に支えられて、研究テーマの細分化と個別の実証的研究が急速に進行していくことになる。とりわけ1920・30年代に関する史実の発掘が進展していくなか、とりわけ社会主義・労働運動・在日朝鮮人に関する研究が軌道に乗り始めるのが、この時期の特徴である。また、必ずしも実証的であるとは言い難いものの、いわゆる「現代史」、すなわち韓国・北朝鮮の政治・経済に関する現状分析的な論考も数量的には増加していくことになる。

日韓関係史研究に直結するものとしては、やはり「開化派・開化期」に関する研究が特徴的であり、この端緒にはまず1960年代における〈金玉均〉ら初期開化派・独立党に対する評価の問題があつた。この時点では「甲申政変」がはたして〈ブルジョア革命〉であつたか否か、といった上述の「内在的發展論」とも通底する論議が活潑であつたが、さらにこれが80年代後半から90年代にかけて近代の「受容」に関する諸問題（例えば万国公法の受容と開化派官僚・啓蒙知識人）に関する研究³¹に発展的に引き継がれた。さらに「近代」を相対化する視座が旧韓末の「愛國啓蒙運動」研究にも波及するなど、「内在的發展論」以後においては低調であつた近代史研究上の新たな方法論の模索に新境地が開かれていくこととなった。しかも日韓双方に近代史の文脈を踏まえた新たな研究的視角と課題とを持った、互いに留学経験を有する研究者層が登場してくるのもこの時期の特徴である。

³⁰ 吉野誠「朝鮮史研究における内在的發展論」（『東海大学紀要 文学部』47、1987年9月）を参照されたい。

³¹ 原田環『朝鮮の開国と近代化』（広島、溪水社、1997年2月）が代表的な研究である。また最近、中国近代史の立場からではあるが、田保橋の研究を発展させる可能性が高いと考えられる岡本隆司『属国と自主のあいだ ―近代清韓関係と東アジアの命運―』（名古屋、名古屋大学出版会、2004年10月）が上梓され注目される。

1980年代末から1990年代とは、韓国の高度経済成長、ソウル五輪の開催を経て軍人出身大統領が史的舞台から姿を消し、かわって文民大統領が再登場する時期であった。そうした空前の経済的活況から経済危機までを経る情勢を反映してか、韓国においては俄に「植民地近代化」に関する議論が大いに沸騰することになる。この前提にはやはり70年代末から日韓双方の経済史研究者によって進められていた日本統治下の植民地経済に関する実証研究の一つの帰結³²があった。とりわけ、「土地調査事業」を単なる土地収奪の権力的暴力装置としてではなく、朝鮮社会在来の土地所有形態におけるその近代的再編と捉えるパラダイム転換の提示は、韓国側の民族主義的な研究とは相容れなかったものの、一方で経済史分野においては極めて能動的に受け入れられ、今日に至っている。

加えて、90年代から今日までにおいては近代日本におけるいわゆる「帝国編成」に関する諸議論が活況を呈している。これは、かつての「日本帝国主義」研究とは明確に一線が画され、また従来のマクロ経済的な植民地研究では取り扱い難かった領域、すなわち「言語」「学歴」「官僚制」「国籍」「衛生」「労働」「ジェンダー」等々、法域・文化・思想・身体に跨る近代の「知の歷程」と呼ぶべき複合的かつ重層的な研究テーマが設定されている。植民地近代化の議論も、徐々にではあるが「ポスト・モダン」「ポスト・コロニアリズム」なる相対化の方向に延引され今日に至っている。かつてのいわゆる「強制連行」研究や「在日朝鮮人史」研究が戦時動員・総動員体制研究へ、あるいは「従軍慰安婦」研究が近代公娼制に関する研究へ移行しつつあることなどは、まさに今日の状況と言えよう³³。

さらに附言すれば、近年における開港期の新しい研究動向としては「宗家文書」をも利用した〈倭館—対馬藩〉を軸にする外交ルートに関する検証作業が進捗しつつあるのが刮目すべき事例の一つ³⁴である。既述した田保橋の研究を補完・発展させる可能性を大いに秘めている。周知の通り、宗家文書を利用した研究は近世の、しかも主として日本側の研究者によってなされてきた。しかし、最近では日本のみならず、韓国における宗家文書の収蔵先である国史編纂委員会を中心とした研究が軌道に乗りつつあり、ひいては釜山・慶尚道における対日貿易研究が地方史・郷村社会史研究の進展とも相俟って徐々にではあるが近代の領域に進出しつつある。

すると、やはり今後において予想される研究の方向とは、そうした朝鮮半島における開港・開化

³²宮嶋博史『朝鮮土地調査事業史の研究』〈東京大学東洋文化研究所紀要別冊〉(東京、汲古書院、1991年2月)、および宮嶋博史・松本武祝・李榮薫・張矢遠『近代朝鮮水利組合の研究』(東京、日本評論社、1992年12月)、堀和生『朝鮮工業化の史的分析』(東京、有斐閣、1995年7月)などが代表的である。

³³松本武祝「“朝鮮における「植民地的近代」”に関する近年の研究動向 —論点の整理と再構成の試み—」(『アジア経済』43-9、2002年9月、のち宮嶋博史・李成市・尹海東・林志弦編『植民地近代の視座』(東京、岩波書店、2004年10月)に再録)を参照されたい。

³⁴石川寛氏による一連の論考(「明治維新时期における対馬藩の動向 —日朝外交一元化と朝鮮・対馬関係—」/『歴史学研究』709、1998年4月・「近代日朝関係と外交儀礼 —天皇と朝鮮国王の交際の検討から—」/『史学雑誌』108-1、1999年1月・「明治維新时期の対馬藩政と日朝関係」/『朝鮮学報』183、2002年4月・「日朝関係の近代的改編と対馬藩」/『日本史研究』480、2002年8月・「倭館接收後の日朝交渉と対馬」/『九州史学』139、2004年6月)を参照されたい。

期、日本における明治維新以降の内政と外交とを複眼的かつ横断的に再構築すべき日韓／韓日の「関係史」であると思料される。これをもってしてこそ日清・日露両戦役を経て、韓国併合・総督政治、そして〈解放〉後の史的動向を丹念に跡づけていく作業を可能ならしめるものである。

なお、日韓関係の研究はすでに戦後期、とりわけ日韓国交正常化交渉期までが徐々に史学的手法、すなわち史料に基づく実証研究の対象になりつつある。いまだ、外交文書(特に日本側)が公開されていないなど、史料面での不足感という憾みは残るものの、単なる外交交渉史に止まらない、総合的かつ複合的な日韓関係史研究の礎となっていくことであろう。例えば、京城帝大史学科卒にして、戦後は法務事務官・外務事務官として日韓交渉の実務における裏方に徹した森田芳夫(1910～1992)の業績などはすぐれて象徴的である。すなわち、『朝鮮終戦の記録』(1964年)においては、日本人世話会・引揚援護局での実務経験をもって米ソの朝鮮進駐、日本人の引き揚げを実史料と証言収集によって余すところ無く描ききり、また在日韓国・朝鮮人の史的な動態把握を各種の統計資料を駆使して試みるなど、戦後ならではの日韓関係史研究に先鞭をつけた功績は不朽のものとして学術的な評価は定着している。彼が晩年に取り組んだ「日韓国交正常化交渉の記録」(未刊行)は、将来的に「日朝交渉」史を編綴する上での前提ともなっていくことであろう。

また、在日韓国・朝鮮人研究者たちの存在も戦後ならではのものである。彼らのライフヒストリーそのものは、戦前期を引きずっているとは言え、近年では留学生出身のいわゆるニューカマー世代の研究者も増加する一方である。

よって、筆者としては開港期～韓国併合～日本統治期～解放後～現代を通観しうる日韓／韓日関係史像の構築とは、官学・在野を問わず、近代の「史学史」的な視角から、それを担った代表的な人物像とその業績の把握に比重を置いた日韓関係史研究を総括し、ひいてはその戦前と戦後の連続／不連続を検証していくことによって、為しうることであると確信している。

【参考資料】

戦前期における日韓関係史関連主要著作年表

1892(明治25・高宗29)年	12月: 林泰輔『朝鮮史』(全5冊、東京、吉川半七)
1896(明治29・建陽元)年	10月: 菊池謙讓『朝鮮王國』(東京、民友社)
1901(明治34・光武5)年	6月: 林泰輔『朝鮮近世史』(東京、吉川半七)
1902(明治35・光武6)年	9月: 『韓國研究会談話録』第1号(大江卓発行、以降、第4号まで刊行か)
1905(明治38・光武9)年	12月: 幣原坦『日露間之韓國』(東京、博文館)
1907(明治40・光武10)年	6月: 幣原坦『韓國政争誌』(東京、三省堂書店)
1908(明治41・光武11)年	11月: 『高麗史』第一(東京、國書刊行會、第二: 1909年7月、第三: 1909年10月) * 重野安禪の序文
1909(明治42・隆熙3)年	5月: 前間恭作『韓語通』(東京、丸善株式会社) ※朝鮮古書刊行會より「朝鮮群書体系」刊行開始(『大東野乘』: 1909年12月より発刊、1916年まで順次刊行、全83冊)
1910(明治43・隆熙4)年	3月: 『顧問警察小史』(漢城、内部警察局) 5月: 細井肇『現代 漢城の風雲と人士』(漢城、日韓書房) 6月: 青柳南冥『日韓史蹟』(京城、町田文林堂) 11月: 喜田貞吉『韓國之併合と國史』(東京、三省堂書店) / 『歴史地理 臨時増刊朝鮮號』(三省堂・日本歴史地理学会)
1911(明治44)年	※「朝鮮研究会古書珍書」刊行(1911~1918年、全56冊) 4月: 青柳南冥『朝鮮宗教史』(京城、朝鮮研究会) 8月: 細井肇『朝鮮文化史論』(京城、朝鮮研究会)
1912(明治45・大正1)年	※朝鮮光文會より「朝鮮光文會叢書」刊行(崔南善編、1912年6月に『道里表』: 1912年6月より刊行開始、1915年まで順次刊行、全18編) 8月: 林泰輔『朝鮮通史』(東京、富山房) / 戸叶薫雄・楢崎觀一『朝鮮最近史』(東京、蓬山堂) 9月: 青柳南冥『李朝五百年史』(京城、朝鮮研究会)
1913(大正2)年	11月: 『朝鮮歴史地理』1・2(東京、南滿洲鉄道株式会社) 12月: 『京城學海』第1巻第1号(京城、京城学海社) / 幣原坦『日韓關係よりの對州研究』(広島、広島高等師範學校地理歴史學會)
1914(大正3)年	1月: 朝鮮総督府『朝鮮統治三年間成績』
1915(大正4)年	3月: 『朝鮮圖書解題』(朝鮮総督府、のち1919年3月に訂正増補版を刊行) 9月: 青柳南冥『朝鮮外寇史』(京城、朝鮮研究会) 10月: 朝鮮総督府『朝鮮施政の方針及実績』 12月: 『滿鮮地理歴史研究報告』(東京帝国大学文科大学・東京帝国大学文学部) 第1号(第16号: 1941年10月まで刊行)

1916(大正5)年	
1917(大正6)年	7月:青柳南冥『朝鮮四千年史』(京城、朝鮮研究会)
1918(大正7)年	3月:朝鮮総督府『朝鮮ノ保護及併合』 9月:青柳南冥『總督政治』(京城、朝鮮研究会)
1919(大正8)年	3月:『朝鮮金石總覽』(朝鮮総督府)
1920(大正9)年	2月:『朝鮮ノ土地制度及地稅制度調査報告書』(朝鮮総督府) *和田一郎 3月:『朝鮮語辭典』(朝鮮総督府、12月から市販) 11月:小倉進平『朝鮮語學史』(京城、大阪屋號書店)
1921(大正10)年	※「通俗朝鮮文庫」(京城、自由討究社、1921年3月~1922年5月、全12冊 ³⁵)
1922(大正11)年	※「鮮滿叢書」(京城、自由討究社、1922年7月~1923年8月、全11冊 ³⁶) 11月:浅見倫太郎『朝鮮法制史稿』(東京、巖南堂書店)
1923(大正12)年	7月:青柳南冥『李朝史大全』(京城、朝鮮研究会) 9月:『朝鮮史講座』第1号(京城、朝鮮史学会、以下、第15号:1924年11月に て完結)
1924(大正13)年	3月:小田省吾・魚允迪『朝鮮文廟及陸廡儒賢 附朝鮮儒學年表朝鮮儒學淵源譜』 (京城、朝鮮史学会) / 小倉進平『南部朝鮮の方言』(京城、朝鮮史学会) 12月:幣原坦『朝鮮史話』(東京、富山房)
1925(大正14)年	9月:稻葉君山『朝鮮文化史研究』(東京、雄山閣)
1926(大正15)年	1月:『朝鮮史學』第1号(京城、朝鮮史学同攷会、以降、第7号:1926年7月ま でで終刊か) 3月:釋尾東邦『朝鮮併合史』(京城、朝鮮及滿洲社) / 松田甲『日鮮史話』第 一編(朝鮮総督府、以降、第六編:1930年3月まで刊行) 7月:青柳南冥『朝鮮史話と史蹟』(京城、朝鮮研究会)
1927(昭和2)年	8月:小田省吾・瀨野馬熊・杉本正介・大原利武『朝鮮史大系』(全5巻、京城、 朝鮮史学会)
1928(昭和3)年	2月:朝鮮史学会編『三國史記』(京城、朝鮮史学会) 3月:青柳南冥『總督政治史論』(京城、京城新聞社)

³⁵ 第1輯:『牧民心書』(1921年3月)、第2輯:『莊陵誌』・『謝氏南征記』(1921年4月)、第3輯:『朋黨士禍の検討』・金萬重『九雲夢』(1921年5月)、第4輯:『朝鮮歳時記・廣寒樓記』(1921年6月)、第5輯:『懲瑟録・南薰太平歌』(1921年7月)、第6輯:『丙子日記』(1921年9月)、第7輯:『洪吉童傳』(1921年10月)、第8輯:『八域誌・秋風感別曲』(1922年2月)、第9輯:『瀋陽日記・沈清傳』(1921年2月)、第10輯:『雅言覺非・薔花紅蓮傳』(1922年4月)、第11輯:『大亞游記』(1922年4月)、第12輯:『李朝の文臣・各種の朝鮮評論』(1922年5月)。

³⁶ 第1巻:申維翰『海游録』・『燕の脚』・菊池謙讓『各種の朝鮮評論』(1922年7月)、第2巻:申維翰『海游録(下)』・『鳳凰琴(上)』・對星樓山人『大東游記』(1922年8月)、第3巻:細井肇『侍天教の教旨』・『東經正義』・『鳳凰琴(下巻)』(1922年9月)、第4巻:山地白雨『悲しき國』(1922年)、第5巻:『東經正義(下)』・『朝鮮問題講演集』(1922年11月)、第6巻:一然撰『三國遺事』(1923年2月)、第7巻:『鄭鑑録』(1923年2月)、第8巻:鄭東愈『晝永編(上巻)』・李圭璋『淑香傳』(1923年3月)、第9巻:弓削幸太郎『朝鮮の教育』(1923年5月)、第10巻:『罷睡録』(1923年6月)、第11巻:『晝永編(下)』・雲英傳』(1923年8月)。

	<p>9月:朝鮮史学会編『三國遺事』(京城、朝鮮史学会)</p>
1929(昭和4)年	<p>3月:『朝鮮叢話』(朝鮮総督府)*松田甲著 4月:金沢庄三郎『日鮮同祖論』(東京、刀江書院、のち汎東洋社より1943年5月に再刊) 8月:細井肇『朝鮮宮廷秘話 大院父王國太公の毗』(東京、昭文社) 9月:京城帝国大学法文学会編『朝鮮支那文化の研究』(東京、刀江書院)／大原利武『朝鮮史要』(京城、朝鮮史学会) 10月:高橋亨『李朝佛教』(東京、寶文館) ※京城帝国大学より「李朝実録」(太白山本)の影印版作成刊行開始</p>
1930(昭和5)年	<p>1月:朝鮮史学会編『新增東國輿地勝覽』第1～第4(京城、朝鮮史学会) 4月:田保橋潔『近代日支鮮關係の研究 天津條約より日支開戦に至る』[京城帝国大学法文学部研究調査冊子第3輯](京城、京城帝国大学) ※1930(昭和5)年4月:李王職、『高宗太皇帝實録』および『純宗皇帝實録』の編纂を開始、1935年3月に刊行 8月:『月刊 朝鮮學報』第1巻第1号(京城、朝鮮学報社、第1巻第2号:1930年9月で終刊か) 8月:『青丘學叢』第1号(以降、第30号:1939年10月にて終刊) 9月:高權三『近代朝鮮政治史』(東京、鋼鐵書院) 11月:『日韓合邦秘史』上巻(東京、黒龍会出版会、下巻は同年12月刊) 12月:『木浦府史』(木浦府)</p>
1931(昭和6)年	<p>3月:『小田幹治郎遺稿』(神戸、小田梢)／細井肇『女王閔妃』(東京、月旦社)／松田甲『續日鮮史話』第一編(朝鮮総督府、以降、第三編:1931年7月まで刊行) 5月:鮎貝房之進『雜攷』第1輯(京城、朝鮮印刷、以降、第9輯:1938年5月まで刊行) 7月:『京城帝大史學會報』第1号(第9号:1936年11月刊より『京城帝大史學會誌』に改題、以降、第18号:1942年3月まで続刊) 10月:小田省吾『朝鮮小史』(東京、魯庵記念財団) 11月:『瀨野馬熊遺稿』(東京、瀨野いと)</p>
1932(昭和7)年	<p>3月:朝鮮史編修会『朝鮮史』(第1編:第1巻「朝鮮史料」・第2巻「日本史料」・第3巻「支那史料」、および第2編から順次刊行開始、以降、第6編第4巻:1938年3月にて完結、全37冊) 9月:關野貞『朝鮮美術史』(京城、朝鮮史学会) 12月:朝鮮史編修会『朝鮮史料叢刊』(第1:『高麗史節要』から刊行開始、以降、第20:『正徳朝鮮信使登城行列圖』<1938年3月>にて完結)</p>

1933(昭和8)年	<p>1月:『朝鮮民俗』第1号(以降、第3号:1940年10月まで刊行か)／高権三『近世朝鮮興亡史』(東京、考古書院)</p> <p>2月:『尹文學士遺稿』</p> <p>3月:『朝鮮總覽』(朝鮮總督府)</p> <p>7月:高権三『朝鮮政治史綱』(東京、永田書店)</p> <p>9月:白南雲『朝鮮社會經濟史』(東京、改造社)</p> <p>10月:『仁川府史』(仁川府)</p>
1934(昭和9)年	<p>2月:朝鮮總督府編『慶州郡』(朝鮮總督府)</p> <p>3月:『京城府史』第1卷(京城府、以降、第2卷:1936年3月、第3卷:1941年3月)</p> <p>9月:小田省吾『辛未洪景來亂の研究』(京城、小田先生頌壽記念会)</p> <p>10月:朝鮮總督府中枢院編『經國大典』(朝鮮總督府中枢院)／信夫清三郎『日清戦争 その政治的・外交的觀察』(東京、福田書房)</p> <p>11月:小田先生頌壽記念会編『小田先生頌壽記念朝鮮論集』(京城、大阪屋號書店)</p> <p>11月:『震檀學報』第1号(以降、第14号:1941年6月にて停刊)</p>
1935(昭和10)年	<p>1月:今西龍『朝鮮史の栞』(京城、近澤書店)</p> <p>3月:奥平武彦『朝鮮開國交渉始末』<京城帝国大学法学会論纂(1)>(刀江書院)／朝鮮史編修会『朝鮮史料集眞』(上より順次刊行、下:1936年3月、続:1937年3月にて完結)／朝鮮總督府中枢院編『續大典』(朝鮮總督府中枢院)</p> <p>※京城帝国大学法文学部より「奎章閣叢書」刊行開始(第1:『瀋陽?啓』、以降、第9:『老乞大諺解』<1944年3月刊>まで刊行)</p> <p>7月:朝鮮總督府中枢院編『大典続録及註解』(朝鮮總督府中枢院)</p> <p>10月:『施政二十五年史』(朝鮮總督府)</p> <p>11月:青柳南冥『赤裸々に見た内鮮史論』(京城、東亜同民協会)</p>
1936(昭和11)年	<p>3月:小田省吾『朝鮮陶磁史文献考 附釜山和館考』(東京、學藝書院)</p> <p>／『朝鮮史のしるべ』(朝鮮總督府)／池内宏『朝鮮の文化』(東京、岩波書店<岩波講座・東洋思潮>)／朝鮮總督府中枢院調査課編『校訂大明律直解』(朝鮮總督府中枢院)</p> <p>4月:李清源『朝鮮社會史讀本』(東京、白揚社)</p> <p>10月:『東亞先覺志士記傳』上卷(東京、黒龍会出版部、下巻は11月刊)／李清源『朝鮮讀本』(東京、學藝社)</p> <p>11月:池内宏『文祿慶長の役』(東京、東洋文庫)／『京城帝國大學創立十周年 記念論文集(史學篇)』<京城帝国大学文学会論纂第5輯>(東京、大阪屋號書店)</p>

	12月: 菊池謙讓『近代朝鮮裏面史』(京城、朝鮮研究会本部・東亜拓殖公論社)
1937(昭和12)年	3月: 朝鮮総督府編(末松保和著)『新增東國輿地勝覽索引』(朝鮮総督府中枢院)／朝鮮総督府中枢院調査課編『校訂世宗實録地理志』(朝鮮総督府中枢院) 6月: 赤松智城・秋葉隆共編『朝鮮巫俗の研究』上(京城、大阪屋號書店、下: 1938年10月) 7月: 『書物同好會冊子』第1号刊行(第1号: 鮎貝房之進『支那及び朝鮮の古活字に就て』／以降、第11号: 田川孝三『對馬藩士小田幾五郎と其の著書』<1940年8月>まで刊行)／李清源『朝鮮歴史讀本』(東京、白揚社) 10月: 京城帝国大学文学会編『朝鮮文化の研究』(京城、朝鮮公民教育会) 11月: 小田省吾『増訂 朝鮮小史』(京城、大阪屋號書店)／池内宏『滿鮮史研究 中世第二冊』(東京、座右寶刊行會)／白南雲『朝鮮封建社會經濟史』(東京、改造社) 12月: 宮崎五十騎『概觀朝鮮史』(東京、四海書房)
1938(昭和13)年	3月: 『史學論叢』<京城帝国大学文学会論纂第7輯>(東京、岩波書店)／朝鮮総督府中枢院調査課編『校訂慶尚道地理志 慶尚道續撰地理誌』(朝鮮総督府中枢院) 6月: 小田省吾述『德壽宮史』(京城、李王職)／『稻葉博士還暦記念 滿鮮史論叢』(京城、稻葉博士還暦記念会)
1939(昭和14)年	7月: 『書物同好會會報』第1号(19・20合併号:1943年12月で終刊) 10月: 稻葉岩吉編『平安北道史』(平安北道) 11月: 森田芳夫『國史と朝鮮』<今日の朝鮮問題講座(6)>(京城、緑旗連盟)
1940(昭和15)年	2月: 三品彰英『朝鮮史概説』(東京、弘文堂) 3月: 田保橋潔『近代日鮮關係の研究』上／下(朝鮮総督府中枢院) 5月: 小倉進平『増訂 朝鮮語學史』(東京、刀江書院) 7月: 京城帝国大学大陸文化研究会編『大陸文化研究』(東京、岩波書店) 10月: 中村栄孝『東亞新秩序の建設と古代大陸經營の先蹤』(朝鮮総督府)／『施政三十年史』(朝鮮総督府)
1941(昭和16)年	3月: 櫻井義之編『明治年間朝鮮研究文獻誌』(京城、書物同好会) 6月: 渡邊勝美『朝鮮開國外交史研究』(京城、私家版) 11月: 『史學論叢 第二』<京城帝国大学文学会論纂第10輯>(東京、岩波書店) 12月: 末松保和編『朝鮮歴代實録一覽』(京城帝国大学)
1942(昭和17)年	10月: 崔虎鎮『近代朝鮮經濟史 李朝末期に於ける商業及び金融』(東京、慶應書房)

1943(昭和18)年	<p>1月:『學叢』第1号(京城、京城帝国大学文学会、第3号:1944年10月まで刊行か)</p> <p>3月:『大邱府史』(大邱府)</p> <p>4月:京城帝国大学大陸文化研究会編『續大陸文化研究』(東京、岩波書店)</p> <p>8月:『全州府史』(全州府)</p> <p>9月:森田芳夫『御稜威に甦る朝鮮 内鮮の歴史を顧て』(京城、国民総力朝鮮連盟)</p> <p>10月:崔南善『故事通』(京城、三中堂)／崔南善『新訂三國遺事』(京城、三中堂)</p>
1944(昭和19)年	<p>2月:林泰輔『朝鮮通史』(岡崎、進光社) * 諸橋徹次の序文</p> <p>3月:『近代朝鮮史研究』<朝鮮史編修会研究叢纂第一輯>(朝鮮総督府)／今西龍遺著『高麗史研究』(京城、近澤書店)</p> <p>4月:前間恭作編『古鮮冊譜』第一冊(東京、東洋文庫)</p> <p>6月:小倉進平『朝鮮語方言の研究』上(東京、岩波書店、下:1944年9月刊)</p> <p>7月:洪以燮『朝鮮科學史』(東京、三省堂)</p>
1945(昭和20)年	<p>4月:河野六郎『朝鮮方言學試攷 -『欽』語考-』(京城、東都書籍)</p> <p>※〔未刊〕田保橋潔『朝鮮統治史論稿』</p>

【凡例】斜体の書名は定期刊行物であることを示す。

※永島広紀「日本統治期の朝鮮における〈史学〉と〈史料〉の位相」(『歴史学研究』795、2004年11月)所収の「参考資料」を元に適宜に補正を行った。また本表の作成にあたっては桑野栄治氏の貴重なる助言を賜った。特に記して謝意を表したい。